

學者が忘れてゐる星座 (3)

Forgotten Constellations.

山 本 一 清 Issei Yamamoto.

Tarandus vel Rangifer 馴鹿 (となかひ)

地球の形狀を觀測するためにアカデミから派遣され、フランスの天文觀測隊の一員として、北歐のラプラントへ1736年に出張したルモニエ (P. C. Le Monnier) が、出張先で屢々見馴れた“となかひ”を、遠征紀念のため、新しく星座として、北天に作つたもので、この星座は、セフェウス座の東北部と、カシオペア座の北端の一部とに擴がり、星は皆5等以下の微光のものばかりで、暗夜でないと、目立たない。東西も南北も10°ばかりの小星座である。ドイツのボーデも此の星座を其の著書中に採り入れてゐる。

Telescopium Herschelii ハーシェル望遠鏡

かのキリヤム・ハーシェルが1718年三月に双子座に於いて天王星を發見したことは、有名な話で、全世界は此の報知により非常な感激を受けたのであるが、澳國の天文家ヘル (Maximilian Hell) 師は、この大事蹟を永久に紀念するため、“ハーシェルの望遠鏡”といふ新星座を作つた。この星座は双子座の北東部にあるピ星から、駭者座の65, 63, 58, 50番星を貫いて、41番星に及び、殆んどペ星に至る20°ばかりの長さ、望遠鏡の筒を畫き、駭者座の東部一帯にわたつて此の器械の臺を畫いたもので、言ふまでもなく之はハーシェルが天王星の發見に使用した7呎 (2.1米) の反射鏡を畫いたものである。このあたりは双子座と駭者座と山猫座との間に挟まつて、5等星以下の星ばかりの散らばつてゐる天空であるが、廣さは可なり廣い。

Taurus Poniatowskii ポニャトフスキ王の牛

第18世紀の末、ポーランド國のキルナの僧正ポチョブイトが、同國王ポニャトフスキ (Stanislaus Poniatowski) 王の榮光を紀念するために作つた星座で、フランスのアカデミが公認し、ウゾは Taurus Regalis (王の牛座の意) と呼び、ドイツでは之を“ポーランド牛”とも唱へてゐる。

位置は蛇使ひ座の北東部で、67, 68, 70, 72番星等の4等星を含んでゐるけれど、他は皆、微光の星である。しかし、廣さは相當に廣い。之れが“牛”の星座と呼ばれる理由は、66, 67, 68, 70, 73番星等の星の配列の形が、黃道の牛星座のヒヤデス群の配列に似てゐるからである。ポチョブイト師は最初この牛の首の部分の7ヶの星だけで此の星座を作つたのだつたが、ボーデは後にもつとひろく北東部の微光星までも之れに加へて、可なり大い星座としたのであつた。尙、

今から千年も前のアラビヤ文化時代には、このポニヤトフスキ王の牛座（特に首の部分）に“三角形”の星座が認められてゐたとのいひ傳へもある。

Triangulum Minor 小三角座

三角座は、元來ア、ベ、ガの3星を三角形に結びつけたものであるが、そのすぐ南東隣にある3ケの5等星（6番星と、10番星と、12番星と）をヘベリウスは“小三角”と名づけて、一つの新星座を作つたものである。光も形も誠に小さい星座であるし、又、實際こんな星座を、作ろうと思へば、天空のあちらこちらに、いくらでも作り得るのであるが、しかし、ヘベリウスが作り、ゴアやプロクタ等が近年に至るまで之を採り扱つてゐたといふ“箔”がついてゐるので、やはり棄てられない。ゴアは之れを Triangula と綴つて、女性にしてゐる。

Turdus Solitarius 孤島の鶇

フランスの天文家ルモニエが1776年に作つたもので、ヒドラ座の尾端にある。之れはインド洋上の Rodrigues といふ孤島（マダガスカル島の東方のモリシヤス島の、尙その東方洋上にある。英領）に於いて、最初の探検家が見つけた一種の珍鳥を記念するために作られたものである。しかし、この鳥は近年全滅して、全く死に絶えて了つた。星はヒドラ座の54番星から58番星までの星々と、天秤座のア星とイ星とシ星との中間に含まれる微星のみを含んでゐるが、シ星自身は含まれてゐない。

Jordanus ヨルダン河

第17世紀のヤコブ・バルチが著した星圖の中に、ヨルダン河といふ名で、エリダン河の星座の如く、曲りくねつた長い星座が書かれてある。其の位置は、今の獵犬座から始まり、大熊座の後肢のあたりを通り、それから小獅子や山猫座に及ぶもので、つまり、大熊座の外廓を半周したやうな形である。即ち、今から300年も以前、獵犬、小獅子、山猫、ジラフ等の星座が未だ作られてゐなかつた時代であるから、大熊座の周圍、牧夫や獅子、双子、馭者等の諸星座との間に一連の空き間があつたので、このヨルダン河の星座によつて塞いだのである。——たしかに、これは、トレミ以來の古代天文家が見落した星々を拾つて、つなぎ合はせたもので、初春の天空に之を仰いで見ると、或る川筋の想像が許されないわけでもない。尤も、しかし、これは餘りに長い形で、甚だ覺えにくいものと思はれたのであろう、後代には獵犬その他の小星座が此のヨルダンの河筋に作られた。

ヨルダン河とは、地中海の東岸パレスチナに於いて、南北に流れる有名な現實の河で、聖書には、舊約時代から屢々記載せられ、篤信な基督教徒には忘れられない河である。

Cancer Minor 小蟹

第17世紀のポーランドの彗星學者ルビエニツキ (S. Lubienitzky) が蟹座の西部、双子座との間に、蝦に似た形の“小蟹”星座を作つた。まことに小さい星座で、最も微光のものばかりであるから、馴れない人々には殆んど眼につかないのである。しかし、双子と蟹との間には、誰が見ても一寸そこに空虚の感じがあるので、何かの新星座によつて之を塞がうとした心持ちは理解出来ないでもない。

黃道十二星座の配列してゐる中へ割り込んで、こんな位置に新星座を作るといふことは、まことによけいな事であるやうに近代人は考へるかも知れないが、中世の天文家のこうした心持ちを理解するためには、(いづれ、別稿に詳記するつもりであるが、) 星座といふものの根本から考へ直す必要があるし、又、今の都會生活者と違つて、昔は、夜空を眺める場合の人工的な燈火の妨害が無かつたものだから、言はゞ、眼に星が澤山見え過ぎて、古人に見逃がされてゐる星形を、棄てゝ置けなかつたものと思はれる。この心持ちは、今でも都會を離れた田舎で星空を仰ぐ者には肯かれるところである。

Tigris ティグリス河

ケプラの弟子であつたヤコブ・バルチ(或は、ラテン化して、バルチウス)は、蛇遣ひ座の東部から東へ“ティグリス河”といふ新星座を作つたことがある。これは、蛇遣ひ座のベ星やガ星のあたりから始まり、鷲とヘルクレスとの間を通りぬけ、矢座の一部をかすめ、白鳥のベ星の近くから、狐座を東へ縦走し、小馬を経て、ペガソスの首のあたりまで及ぶものである。夏の空に、これを追跡することも意味が無いわけではないが、どうも之れは甚だまぎらはしい河筋と言はざるを得ない。どうせ、肉眼觀察にのみ訴へるのだから、只、特殊な敏感の持ち主のみが直感する星象かも知れないが、自分も之には少々閉口してゐる。それにしても、昔の人は、よく々々物ずきな星座を作つたものである。

エリダン河が一名“ユーフラテス河”と呼ばれるものだから、古代文化史上、これと並稱されるティグリス河を、やはり、星座として、こゝに認めたのであらう。(つづく)

天 の 川 (6句)

さばてんに夜々の銀河の位置がある	雄 一
風鈴や既に銀河の見ゆる窓	鑽 太 郎
うしを鳴る鳴門の空や天の川	澄 子
病院船銀河の海をふるさとへ	福 三
銀漢や蒙古へつゞく山の波	大 吉 林
満潮の河口廣し天の川	鬼 灯